
僕らの未来に正義は無い

智恵理薫侘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの未来に正義は無い

【Nコード】

N5175W

【作者名】

智恵理薫侘

【あらすじ】

高校入学も無事に済んだ彼は入学式を終えて時間を無駄に過ごしている。少女とであう。少女は唐突に彼へ言葉を放つ、「このクズが」と。少女と話していくうちに何故か一緒に行動するはめに、そしてこれからの学校生活にて彼女の提案した一つの言葉が彼の未来に波乱を呼ぶ。

1 - 1 (前書き)

初めまして、智恵理薫侘と申します。まだ小説の執筆経験は浅いですがよろしくお願ひします。ちなみにこの物語はフィクションであり、実在の人物及び団体とは一切関係御座いません。

「このクズが」

「……え？」

生まれてこの方、検査では鼓膜に異常など一度も無く、むしろ僕の身体は風邪もそれほど引かない健康体であって……それはどうでもいいとして、だ。

今聞いた言葉は果たして本当に「このクズが」なのだろうか。もしかしたら聞き間違いかもしれない。何と聞き間違えたのか、このくずが……ああ、そうだ。葛だ、「この葛が」なのかもしれない。ほら、そこらを探してみれば葛の一つどこかに落ちているかもしれないよ。

……んな馬鹿な。

自分で否定して、とりあえず目の前の状況を把握する事にした。艶やかな長い黒髪の少女。

綺麗で雫でも垂らしたらつるりと滑りそうな顔のラインにつぶらな二重瞼に瞳、整った鼻梁の配置、ふつくらとした唇。美少女過ぎる彼女に視線を奪われる中、僕は口を開いた。

「も、もう一度言ってくれろ？」

「このクズが」

間髪居れずに彼女は口を開いた。

聞き取りやすい声、透き通るような声っていつのかな。

もっと聞きたくなるが残念な点は僕の両目を見つめて、その言葉を放ったのだから「このクズが」という言葉は僕に向けられている事だ。

いやいや、待てよ。まだ解らないぞ？　もしかしたら僕の近くに
いる生徒への言葉なのかもしれない。

辺りを見回してみたが、悲しいくらいに人はおらず。

入学早々からどうして僕は美少女にいきなりクズ呼ばわりされな

きやならんのだ。これは精神的にかなりきついてもんじゃあない。ちよつとしたトラウマものだ。

今日は絶対寝る前に君の言葉を思い出すだろう。

泣くかもしれない、寝つけないかもしれない、でも恨めないと思う。

などと考えていると踵を返した彼女は快活な足取りで歩いていく。

僕は「このクズが」の意味を知るために先回りして彼女へ言い寄った。

「あの、さ。どうしてそんな事言うのかな？ 僕は君になんかした

痛いつ」

言い終える前に僕の頬に拳が飛んできた。

もう一度確認する、平手打ちじゃなく拳。

女性からの攻撃はいつから平手打ちが廃止になったのやら、頬の痛みが女性でも拳の重みはあるんだよと教えてくれる。痴漢撃退にはこれから拳での攻撃をお勧めしてみるとしよう。

だがこうして考えると、「このクズが」と言われてさらに殴られるとなればよほどの理由があるはず。

「なんていうか……ごめんなさい」

とりあえず謝っておこう。

何をしたのかさえ解らないけれど、何かしたのだから僕はこうして精神と肉体の両方を傷つけられたのだ。全治三日ほどかも、夢の中にさえ出てきそうな、それほど衝撃的だった。

だってそうだろう？

美少女が目の前に現れて、僕の双眸を見つめて「このクズが」、さらにその後殴られるなんてや平凡な日常で先ず体験など出来ない。そりあちよつとマニアックなお店にお金を払ってまで罵倒されて鞭で打たれて喜ぶ人達ならば体験してるだろうし、ご褒美なのかもしれないが僕はまったくそういった性癖は無いので誤解はしてもらいたくない。

「こつ、もつと普通で手を繋ぎあつて街をぶらぶらするような恋愛ならば大歓迎だけど今はそんな事考えている暇は無い。」

「私は寛大だ、許そう」

殴りたいほどに、というか殴つてしまふほどに怒つていたのは理解したが、理由が依然空白。

許そうとは言いつつも目つきは未だに睨んでいる。つぶらな瞳では可愛さが打ち勝つて心臓の鼓動が跳ね上がる。

可愛いな……。

彼女の名前も知らないし今日が初対面、のはず。

もしもどこかで会つたのだとしたらそれは謝るべきではあるがなかなか思い出せない。中学時代は女性との付き合いは疎いほうだったし何より人付き合いが苦手なほうだ、思い返しても彼女との接点など見当たらない。

ああ、そういえば入学式で新入生代表として挨拶をしていたっけ。あのような行事は眠気を誘う謎の雰囲気は僕の意識を駄目にしてしまふから彼女の名前や話の内容は頭の中を素通りしてしまったので覚えていないけど、壇上上がった時に周りの男子生徒達がやけにそわそわしていたっけな。

噂のなんとかや生徒会候補とかでその場の無駄話は全て彼女の会話に染まった。

「いいや、やっぱり一度殴つておこつ」

言下に、僕の意識は途絶えた。

最後に見たのは何だっただろう、ああ　彼女が僕の顔に拳を勢いよく振るつた姿だったかな。

1 - 1 (後書き)

更新は出来るだけ早くしていけるよう目指して頑張ります。

1 - 2 (前書き)

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
御座いません。

春の清々しさと新しい環境に対する緊張を引きずりつつ、入学式は眠気に勝てず気がついたら終わっていたその日。

これから長い付き合いになるクラスメイトとは現在会話の一つも出来ていない状態。なんていうか人付き合いは苦手なのだ。同じ中学の生徒もいないのでどう接していけばいいのか解らない。

それにクラスメイトの大半は既に教室から出て行ってしまったしね。教室に残っているのは僕のように孤立してしまつた生徒ばかり。初日から出遅れた感じだがまだまだこれからだ、気にする事は無いさと自分に言い聞かせた。

しかし我ながらすごいところに入学したな、と教室の一番後ろ窓側にて窓の外に広がる空を見て小さく溜息を漏らした。

南奥平輪学園高等学校、略して南学は生徒数が千人を越えるこのご時世には珍しい所謂マンモス校。

一年だけでクラスは十一にまで及ぶほどであり、廊下には人、人、人、兎に角その言葉しか思いつかないくらいに人がいる。

今日は授業も無く、後は部活動見学か校内を自由に回るか帰宅かの三択で廊下の生徒達は歩きながら三択を選択中ってわけだ。

僕はあまりの人の多さに三択を保留して机で現在様子見中。

机に置いてある紙を読むと、校内見学では食堂も開放しており、実際に食事するのも可能との事なので食堂にでも行ってみようかな。南学の食堂は広い・美味い・安いらしいので味わっておかねばなるまい。

そういうわけで僕は人が引けてきた頃合いを見計らって食堂へ。

食堂、というよりも大食堂？ それくらいに広く何百といるだろう生徒達を軽々と受け入れて、まだまだ空席があるぜと言わんばかりの食堂に空いた口が塞がらない僕は食券自販機を求めて人の波を掻き分けていった。

ようやくたどり着いた食券自販機コーナーという看板の下には食券自販機が一、二、三……十台。

これなら生徒も昼時に渋滞を引き起こしはしないね、少々置き過ぎやしないかとも思うけど。

メニューは和食から洋食まで取り揃えており安いものは三百円で、高いものは六百円と財布にとても良心的だ。

ただ、高級欄と括られたメニューにはフランス料理であろう料理名で安いものは三千円から、高いものは一万円というセレブ専用があり、僕は卒業までに一度でも購入できるのだろうかと財布の中身に問いかけたが、それは無いねと小銭達が答えた。

何人かはそのセレブ専用のメニューを選んでボタンを押していたが偉大なる諭吉を千円札と勘違いしてやしないかというくらいに自販機へ飲み込ませていた、ああ……僕がそれをお財布へ飲み込ませてあげたい。

そんな僕はというとカツ丼を選んで購入、今日の昼飯三百円なり。出来上がったカツ丼をトレーに乗せて鼻へとちよつと近づけて香りを楽しみつつ席選びをするものの、一人での昼食は予想以上に寂しくて、周りの和気藹々としている雰囲気を押されて僕は一番端の席へ着席。

そんな寂しさも、カツ丼を一口食べたなら吹っ飛んだのでよしとする。

柔らかい牛肉に甘みのあるたまねぎと絡む卵の味、口の中でそれが混ざり合うともはや絶品としか言いようが無くほつぺたが落ちこちるってもんだ！ これからの学校生活での昼食メニューのレギュラーメンバーとして早くも確定、おめでとうカツ丼君。

他のメニューは定番のものから選んでいってレギュラーメンバーを構成していくとしよう、カレーや炒飯、ラーメンなどまだまだ選びたいものはいっぱいいる。

ほっと一息ついたのは午後一時あたり。

生徒達は減る様子が無く、まだまだ校内を見て回ったり部活動を

見学したりと右往左往状態。

とりあえず食堂から出たはいいものの僕は別に部活動はするつもりなんて無いし校内を見て回るにも、あまりに広すぎて迷ってしまいそうて不安だ。

中庭を通ってみると、奥の方で何かが動いていた。

「す、すみませんでした……」

「ならば私の足でもお舐めなさい、この下僕が」

妙な台詞が聞こえてきて、僕は好奇心に撥られて顔を覗かせてみる。

そこには扇子を持った少女と、土下座をしている少女がいて、その光景には些か理解するには時間が必要で、数秒間ほど僕は硬直していた。

土下座をしていた少女は靴下を脱いだ少女の足を涙を流しながら綺麗に舐め、まるで悪魔のような表情でその少女を見つめる、印象的にいわば悪女。

「む……？」

心の中で悪女だなあとか囁いたところで、その少女はこちらに気づいて顔を向けた。

「あ……」

存在を確認して暫しの静止。

中庭は木々が多く茂っていて彼女の顔は木の枝やらでなかなか見づらいが、僕に視線を向けているような気がする。

「いや、その、お邪魔しました」

僕はすぐさまにその場を離れた。

この学校じゃああのような光景は普通なのかもしれない、まだまだ世の中広いからね、僕の知らない事は多いだろう。

うん、気にしちゃ駄目だ。

今は校内を回ってこの学校を知り尽くそう、さっきの事は忘れてさ。

そうだ、屋上にも行ってみるとするか、丁度階段があるし上が

って降りるだけの単純な道のりならば迷う要素は皆無だ。

そうして屋上を目指したのはいいものの、三階あたりで疲れてきたがあと一階の辛抱だと思って何とか到着。身体が随分と鈍ってきてるな、最近は全然運動してなかったからね……。

屋上は生徒はそれほど多くなく僕を含めて三人程度でとこ。

まあ……ベンチがいくつかあるだけで特に面白みなど屋上にあるはずも無く求める必要も無いので仕方が無い。

フェンス越しから町を見渡せるくらいで風景は格別ではあるが、それよりも今日は部活動見学などに時間を割いたほうがよほど利口だろうね。

用はここにいる生徒は暇人って事だ、悲しいけれどこれが現実なのよね。

僕はベンチに座って暫し空を仰いだ。

雲ひとつ無い青空は見てみて心が清々しくなる。今日は五時まで校内にいていらしいので時間はいくらでもある、ここにしばらくいよう。

町を一瞥すると高層ビルがいくつが目立つ、いつ以来だろう、こんな景色を眺めるのは。

森が多かった場所は今や高級マンションがいくつか建てられてるようだし、田舎という言葉はこの町では死語になってしまったように感じる。住んでいて気がつかなかったが、町は確かに変わっているのだ。

それにしても四月の風は当たり続けると肌がひんやりとしてきて耐え難い。屋上という事もあって風が強いのもある。

僕は腰を上げて屋上を出る事にした、しばらくいようと思っただけで今日はもう帰ろうかな。

出口を目指して歩いていった僕は、出口をくぐらずに足を止めた。別にもう屋上には用など無い、ただ出口の方に少女が一人立っていたのだ。それも飛びきりの美少女、この学校は生徒数から考えるとアイドルが通っていてもおかしくは無いが残念ながら彼女をテレ

ビで見た事は無い。

これからスカウトされてテレビに出る可能性は十分にあると思うがね。風に靡く長い黒髪がシャンプーの宣伝にどうですかと持ち掛けたい。

そんな想像はいいとして、だ。

腕を組んで仁王立ちするその少女は僕を見ているような気がする、いや 見ているのではなく、睨んでいるという表現に変えたほうが正しいかもしれない。

僕が右へ移動すれば彼女の黒目も右へ、僕が左へ移動すれば彼女の黒目も左へ。

ここで反復横飛びを試みたら彼女の黒目はどうなるのだろう、なんてくだらない事を考えるのは止めておいて、だ。

僕が屋上にいるのが彼女を睨ませている原因なのかもしれないしここは触らぬ神に祟りなしという事でそそくさと出て行くとしよう。そうして僕は歩数を重ねて彼女の横を通ろうとしたものの、横移動されて道を阻まれた。

「あ、あの……？」

どいてもらってもいいですか？ そう言おうとしたが彼女の顔を見て、引き込まれる魅力に心臓の鼓動が高鳴り、言葉は喉から放たれずに何処かへ雲散されていった。

でもこの状況……何なんだ？

名前も知らない少女に睨まれて、道を阻まれているが僕と彼女はクラスメイトでも無く接点など一切無い。

どうしても接点を挙げるとするならば屋上にいる、それだけだ。すると彼女は大きく溜息をつき、一度目を閉じて眉間にしわを寄せた。数秒間その表情を固定させる。

そして目を開けてゆっくりと彼女は口を開いた。

「このクズが」

1 - 3 (前書き)

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
御座いません。

目が覚めるとそこには青い空と黒い影が一つ飛び込んできた。

太陽はまだまだ元気だと主張して僕の双眸を刺激したためすぐに目を閉じたが、やってきた漆黒の中でどうして青い空と黒い影があったのかを考える。

それに後頭部には柔らかい感触、枕にしてはちょっと小さいが心地が良いが背中あたりは固い感触。手でさつと触れてみると木材の感触がベンチで仰向けになっっているのを理解した僕は、どうして仰向けになっっているのかを考えると同時に今日の入学式から少女に殴られるまでの記憶が走馬灯のように浮かび上がった。

「そうだ、女の子に殴られたんだっけ……」
待てよ……。

よくよく考えてみて、だ。入学式当日に知らない女の子と屋上で会って「このクズが」と言われて殴られるなんて妙な話だ。

そして今はベンチで仰向けになっっているって事は、僕はベンチでうとうとしてそこらへんの柔らかいものでも見つけて枕代わりにして眠ってただけなんじゃないかな。

「夢……だったのか」

そうに違いない。

「いいえ、違うわこのクズが」

違うとさ、わざわざ罵倒までして教えてくれるなんて刺激的な人だ。

黒い影は僕を殴った張本人の頭で間違い無く、頬には彼女の長い黒髪であると思われるさらりとした感触がくすぐったかった。

目を開けるのが少し怖い。

また睨まれてるんじゃないかって思ってさ。

それでも目を開けなければならぬわけで、いざ現実をしてみる
とそこには予想通りの表情をした少女が顔を覗かせていた。

「三十分ほど寝てたわよ」

三十分ね……寝てたんじゃなく気絶してたの間違いだろ？ 主に君のせいだ。

「ほら、起きなさい。膝枕も疲れるんだけど」

完全に状況を把握して、慌てて僕は上体を起こした。

膝枕なんて、僕がいつか叶えたい夢の一つで思いがけないところで実現したけどだか複雑な気分。だってそうだろう？ 僕を「このクズが」と呼んだ奴の膝枕だよ？ 僕を殴った奴の膝枕だよ？ 嬉しいけど、複雑だよ。

僕は姿勢を正して彼女と距離を取った。

それでもって問う。

「あの……僕、どうして君に殴られたんだっけ」

「貴方、見たでしょ」

「見たって何を？」

目覚めたばかりだと思いが上手く回らない。

「中庭」

「え？ あ、ああ、あれか」

そうそう、中庭に少女が二人いて、一人は悪女といたいくらいに恐ろしい事をしていたね。相手を土下座させて自分の足を舐めさせる、もはや相手の心を完全に折る行為だ。

「あんなのは控えたほうがいいと思うよ」

ということ僕はここで、と席を立つたが彼女は僕の腕を掴んで離さない。

「私ね、優等生としてここで過ごしていきたいの」

彼女の顔をよく見てみると、徐々に記憶が蘇ってくる。

入学式の時だ、壇上に上がって一年生代表として挨拶をしていた彼女の姿を。

名前は……小鳥遊なんとか、夢うつつでよく憶えてないけど。

「そうなんだ、だったら尚更だよ」

では僕はこので、と帰宅の第一歩目を踏み込んだが彼女は僕

の足を思いつきり踏んでくる。

「痛いっ！　ちょよ、ちょよと……」

「変な噂を流されたら本当に困るの。それにね、あいつは中学の頃のクラスメイトですごくウザかったから懲らしめただけなのよ？」

懲らしめるといふ言葉を彼女はきちんと理解しているだろうか。

あれは懲らしめるなんて生ぬるい行為だったと僕は思う。

「ここで貴方を何とかしておかないといけないって私は思ったのよね」

「大丈夫、僕は口が硬い」

「でもね、私はちよつとこの学校でやりたい事があるのよ、そのためには人手が必要なの」

「そうかい、頑張つてね」

なんだかこの場をやり過ぎたい一心で対応が適当になってきている。

「貴方を暴力とか脅しとかで押さえ込むよりも、甘い蜜を吸わせて丸め込んだほうがいいかなって思つてね」

怖い事をさらりと言う奴だ。

悪魔のような笑顔を見せる彼女、思わず心の中で悪女再来と呟いた。

「従いなさい、そうすれば楽しい学校生活が待ってるわよ」

従うといつても、嫌な予感しかしない。

ここはどう対応するのが適切だろうか。

従つふりをしてこの場をやり過ぎして後はなるべく避けるとかそういうのがいいかな。

僕は腕を掴まれていて足も踏まれてる、けれど女性の力なんてそれほど強大じゃない、強引に振りほどいて逃げるといふ手もあるが、彼女の顔を見ると気が引ける。

その可愛らしい表情が上目遣いで僕を見ている。

撫でたくなる、触りたくなる、それでも今は駄目だ。

ならば従つたふりが一番かな。

「はい……解りました」

一応下手に出て言葉には重みをつけておいた。

「よろしい。私の事は彪光と呼びなさい、愛を込めてね」

内ポケットから彼女は扇子を取り出して僕の顎をそれで持ち上げた。

「彪……光……」

女性らしくない名前、渋いね。

「うん、いいわね」

「それにしても、可愛いのに何だか残念だ」

はつとして、口を自分で塞いだ。

思わず本音が出てしまった。

「い、い、いきなり何を言うの！」

彼女は肩に軽く拳で殴ってくるが痛くは無かった。

効果音をつけるならばぼかぼかとかさういう音。

見る見るうちに顔が真っ赤になって視線を落としてしまった彪光を見て僕は笑みを溢してしまう。

頭を撫でたくなるくらいに無垢、抱きしめたくなるくらいに綺麗、触れたくなるくらいに可憐。

扇子で顔の下半分を隠しつつ、彼女は腰を上げて歩き出す。

「ふう、も、もうここには用など無いわ、帰りましょう。そうね、

お互い親睦を深めるためにどこかでお茶でもしましょうよ」

親睦を深める……ね。

まあ大人しく彼女についていくとしよう。

帰るといつても帰り道は同じかななどお互い確認はしていないが、一緒に歩くという行動がちょっとした優越感を得られた。

彪光は未だに扇子で顔半分を隠しつつもちらりと僕の顔を見た。

口元は扇子によって窺えないが笑みでにんまりとした口になっているんじゃないかと想像。

校門から出た辺りで彪光は扇子を閉じて顎に添えるようにつけては小さく溜息。

彼女の視線を追って見てみると黒光りした車両、見た目からしてベンツとしか言いようが無い高級感を放つ乗り物が近くに停まっていた。

そのベンツには黒服が一人立っており、こちらへ向かって歩いてくるが彪光は来るなど言いたげに扇子を振って合図すると黒服はその場で停止。

なんだろうあの人は、そんな考えを持ち合わせるのも蛇足にすら思ってしまう外見は見るからに、護衛とかそういう印象。

サングラス越しでどうやら僕を見ているようだけど大丈夫かな、殴られないかな、殺されないかな、大袈裟かな。

「大丈夫よ、貴方は男にも惚れられそうな顔してるけど彼は違うから心配しないで」

僕の思考は口から自然と出ていたのか、彼女は僕の肩を軽く扇子で叩いた。

心配してくれる部分がちよつとずれてるな、とは思っがね。

「普段はあれが普通なの？」

“あれ”というのはもちろん、ベンツで帰宅に護衛付きの事である。

「そうよ、中学からずっとね。もちろん今日は貴方と一緒に帰るわ」それはちよつと嬉しいね。可愛い子と一緒に歩けるなんてさ、まあ中身は見なかった事にして、だ。

先ほどの護衛さんがずっと遠くではあるがついてきているのが気になって仕方が無い。

「もしかしてお嬢……様？」

家にはメイドや護衛達がいる、毎朝車で登校、お嬢様なんて呼ばれてたりして、なんて想像をしてみる。

「貴方が今思い浮かべた想像に近いと思うわ、でも気にしないで」頭の中を探られたような気分だ。

町に入っすぐのところ喫茶店があったので、店の良し悪しなど関係なく僕達は喫茶店へ入った。

テーブル席に座って彼女を目の前にすると何だか緊張してきて、僕はコーヒーを口に運んで落ち着こうとしてみるが、なかなかうまくいかないもんだね。暖かいものってのは落ち着くと聞いたが緊張が増すばかりだ。

「意外と美味しいわねこのコーヒーは」
扇子を華麗に開いて彪光は軽く扇子で扇ぐ。

それは熱いや暑いとかではなくて、コーヒーの香りは鼻腔へと誘い込んでいるようだ。本格的に味の楽しみ方は学んでいる様子。

僕なんかはコーヒーを飲んで苦いけど美味しい！ 略してにが美味しい！ なんつって！ とか阿呆な思考でいつもコーヒー飲んでたけどね。

それも時々ブラックコーヒー、いつもは砂糖入りのあま〜いコーヒー。

「貴方はあま〜いコーヒーでも飲んでそうだけど」
「ごもつとも」

「でしようね、貴方の性格を幼少期から予測するに当たって、成長後は角砂糖一個をコーヒーに入れたら意外と美味しくて今では角砂糖を増やしてあま〜いコーヒーを飲んでる姿が思い浮かんだわ」

彪光はひよつとしたら僕の全てを把握する能力を持っているんじゃないかな。それとも監視カメラでもつけて僕を見張っていたとかさ。

そう思いたくなるくらい正確すぎる。

「それはいいとして、ね。どう？ あの学校の印象は」
「んー、すごいなあって感じ？」

食堂が広くて料理は安くて美味しい、校舎が大きくて綺麗、教室グラウンドが広い、他校とは圧倒的に一つ一つが違うので感想としてはすごいなあとというのが代表で出たがこのすごいなあはこれらの要素が含まれているというわけだ。

「そう……私はすごく退屈って思ったわ」
彼女は扇子を閉じて、僕の顎につきつけた。

テーブルの幅が広いおかげで彼女は無理をして手を伸ばして僕の顎に扇子をつけるその仕草はなんていうか、一言で表現するのならばお茶目。

「退屈と言われても……」

僕はどうすればいいのやら。

自分で言うのもなんだが僕はとてもつまらない人間だ。

「あの学校ね、意外と裏は真っ黒なのよ」

「とうとう？」

「非公認サークルっていうのかしら、そのサークルはね、喧嘩や賭け事で随分とあくどい事をしてるようなの」

どの学校にも必ず不良といった輩はいるが、少々不良の領域を超えているような言い回しだ。

「触らぬ神に祟り無しだね」

「そのサークル、どれか一つ乗っとりましょう」

今日はいい天気だ、こういう日はジョギングとかしてリラックスしたいね。

とか現実逃避を思わず実行しようとするが、彼女の扇子が僕の頬に減り込んで現実から逃がさんとする。

「聞・い・て・る・の？」

「あ、はい、聞いてますよ」

それよりもこの裏メニユーに耳栓とか無いかな？

もしもあるのなら注文して耳栓をしてから話を始めたいと思うのだけど。

まあ……無いが。

「でもいいのかい？ 生徒会候補とかって耳にしたけど」

入学式で誰かが囁いていたのを覚えている。

「ふん、別にいいわよ。生徒会の人から一年の生徒会長選挙に立候補するのはやめてもらいたいと言われたからね」

「一年？」

「知らないの？ うちの学校、生徒が多いから学年ごとに生徒会を

設けてるの。だから毎年三人の生徒会長が存在するのよ。それに加えて総生徒会長も選ばれるらしいわ」

へえ、そうなんだ。

学校資料つてのは一応渡されたけど今頃僕の部屋の片隅で瀕死の重傷を負っていると思う。今日、僕が帰宅したら殉職かな。主にゴミ箱へ搬送だ。

その前に生徒会について一度目を通してはみるとするか。

「二年、三年は今月に選挙。一年は来月に選挙なんだけど、元二年生徒会長から言われてね。私の家柄は極道みたいなものだから印象が悪いのでしょう。むしろ一時期はそうだったから否定はしないわ」
極道ね……。

先ほどにて護衛やらベンツやらそういったものを簡単に用意できるような家となると、連想は大富豪の娘だったのだけれど、極道のほうでしたか……。

驚いた？ そう問われて僕は首を横に振る。

ちよつとした強がりかそうさせたのかも。

「でもさ、だからっていくらなんでも酷くないかなそんな言い方は」
「その人はどうせ生徒会長に立候補して三年生徒会長になると思うから、私みたいなのが一年生徒会長にでもなったら嫌なのよ。聞いた話だと他の立候補者と比べると確定したようなものらしいし」

選挙の前に芽は摘んでおくってか。

「それでも選挙に出て見返してやるのはどう？」

「嫌よ、それよりもあの生徒会長と生徒会に思いつきり迷惑かけるほうが面白いわ。目標はサークルを全て支配して学校を裏で操ってやるの！ 裏の生徒会を作るのもいいわね……」

駄目だこの子……なんとかしないと手遅れになる。

「そして校長も弱みを握って学校を掌握！ 私の高校三年間はバラ色よ！ 喜びなさい、貴方も私の喜びを共有できる資格があるのよ」
拒否権は今日のコーヒー代を僕が負担で手を打ってもらえないかな。

言いたい事は全て言い終えたのか、彼女は扇子を閉じて満足そうにふふんと鼻息を立てる。

「明日から動くわよ」

嫌な予感しかしない学校生活、明日からきつと鬱になるに違いない。

そうしてこの際ついでのので彼女を送るべく僕は少々遠回りなど関係無しに彼女と肩を並べて帰路についた。

大通りを越えて住宅街に入ったところで塀が聳え立ち、しばらく右には彪光、左には塀という妙な状態で肩を並べて、本当にここ住宅街なのかと辺りを見ました。

右側は普通の住宅街だが、左側は僕の身長を軽々と越える塀があつてこの先はどうなっているのかが少し気になるね。

「どうしたの？」

「いや、この塀高いなあつて思つてさ。ここ、どこかの施設とかあるのかな？」

塀が高いほど中に建つ建物の重要さが解る。

病院施設とか研究施設とか、さ。こういう鼠色したコンクリート以外何物でもない塀が囲むものつてそういうものが多いだろう？

「私の家があるだけよ」

「……嘘」

「本当よ」

「マジ？」

「マジよ」

そうして歩く事数分後、見事といたくなる特大の門。木製の門は洪くていいね、それに小鳥遊という表札の隣に黒服の人が一人。

彼女を見るや深々と頭を下げてお帰りなさいませお嬢様、だとさ。「送ってくれてありがとう、また明日ね。楽しみで眠れないかも……ふふ……」

不敵に笑う彼女を見送って手を振ったが、門が閉まると同時に僕はここにいたのがまったく場違いな気がしてそそくさとその場を去

った。

黒服の視線が背中に突き刺さってるのがやけに気になったせいで歩調はやや早く。

少々彪光と僕は友達関係であるとしても釣り合わない気がする。幼い頃はまったく彼女の事なんて何も知らなかったけど、こうして今の彼女を見てみるとこの僕よりも高い塀が“月とすっぱんだぜ”と言ってくるようだ。

次に彪光と会ったら緊張しちゃうかも。ちょっと軽く身体に接触でもしたら黒服に襲われたりして。

なんちゃって、いや……ありうるか。

まあそれはいいとして、僕は歩きながら考える。

橙色に染まり始めてる空を見上げて僕は溜息を空へと溶かして呟いた。

「面倒な事になりそうだ……」

嫌な予感っていうのはよく当たる、本当にね。

一番後ろの窓側端の席っていうのは、窓の外に広がる晴天が授業の邪魔をしてきてなかなか集中できない。

飛行機が飛んでいるのを見ると見えなくなるまで無意識に追ってしまっし、校庭で体育なんかしていると黒板なんて見ているより退屈しない。

かといってずっと窓の外を見ているのも問題であり、授業終了まで残り数分つてところで僕のノートは真っ白。慌てて黒板に書かれている数字と数式という呪文を書き写し終えると同時に授業終了、今日はどの授業も同じような状態ばかりだった。

授業中、何度か周りとコミュニケーションを取ろうと思ったが、僕の隣に座る眼鏡が良く似合う女子生徒はどうにも話しかけるには彼女の放つ威圧感が壁となって言葉が通りそうに無い。

ならば男子生徒、そう、男子生徒との会話なら出来そうだと目の前に座る男子生徒にでも声を掛けてみようと思ったが、このクラス一番の巨体で強面。オールバックが良く似合う格好良いが近寄りがたい男子生徒だ、話しかけたらもしかすれば僕はこの世から消えてしまっかもしれない。

徐々に構成されていくクラスでの所謂グループ作りになり遅れつつ、ならば彼らを取り込めば一つのグループじゃないかと考えたところで引き入れる人徳も話術も無い。

言い訳をするならば隣の彼女、僕は女性への接し方には些か疎い面があり、目の前の彼は先ほども思っていたように近寄りがたい、というかもっ正直に言う怖いのだ。

という事で現状維持を自分に言い聞かせる。

残った斜め右上については入学早々に授業をサボっているのだからはまた今度。名前から外国人だったがどの国なのかは知らない、自己紹介の場でもそこにいなかったからね。アンナ、とかいう名前

で肩に掛かる程度の金色ショートヘアに碧の瞳が印象に残っているからはつきりと憶えている。

昨日はきちんといたが、今日は午前と午後一時間のみ教室にいて残りの時間はどこかへ消えて今も彼女の席は空席だ。日本の授業にまだ慣れてないのかもしれない。

ようやくして授業が終了するとまだ黒板に書かれている呪文を書き写していないのに消し始める教師。

「まっ……」

待つてくさいと言ったところで教師の鼓膜に僕の言葉が届いたときにはどこまで消されてるかは想像が出来る。

つまり言うだけ無駄、諦めるしかないね。

「貸してあげる」

すると隣に座る女子生徒はノートを差し出した。

「あ、ありがとう」

意外、うん、すごく意外だ。

名前はなんだったかな……と脳内をかき回すがノートに名前が書かれていてすぐさまに頭へ送り込んだ。

名前は柳生秋葉、言下に柳生さんと付け足した。

こうしてクラスメイトとの交流を深めていくんだなあなんて思いつつ早めに書き写して彼女へと手渡した。

彼女はノートを受け取るとそそくさと教室を出て行く。

一応……交流を深める第一歩にはなっただんじゃあないかな。

これから少しずつ会話に挑戦してみよう。

残る問題は目の前に座る男子生徒だが、何事も挑戦だね。

名前は……服部新蔵、だったはず。むしろ今ここで「今日の授業難しかったね」とか「部活どこか入ってるの？ 体つきがすごいねえ」なんて言ってみようかな。

すると彼は席を立ち、ゆっくりとした歩調で歩いていき、僕をちらりと見ては静止。

「……」

「……」
何か僕は悪い事をしたのかな、もしかして彼は思考を読み取る超能力者で彼を強面とか怖いとか思っていたそれらは全て筒抜けだったとかだったりして。

……んなまさか。
でもどうして静止する？

もしも気を悪くしたのなら僕はここで席を立ち、床に両手をついて日本伝統である一番の謝罪する姿勢、土下座を披露してみせよう。

などと考えていたら彼は再び歩数を刻みなおして教室から出て行った。

……何だか意味深だ。

とりあえず今日はもう帰る事意外何も無いので僕も教室から出るとしよう。

暇なら掃除を手伝ってとか言われたく無いしね、でもちよつとはそういう交流でクラスメイトと溶け込みたいかなとか思ったり。

教室から出て歩数三步目にて、後ろから肩を叩かれる僕はその肩を叩いた感触が固いものだったのである程度予想して振り返った。

きつと彼女がいるはずだ、とね。

もはや避けようにも避けられないのかも。

「行きますよう」

彪光が予想通りいて、彼女は扇子を振って華麗に開く。

今日は別に大して暑くはないが扇子を開いたら振るのは誰もがやっってしまうもの。それが扇子を持つものの醍醐味。

クラスはどこ？ という質問に対しては三組、と答えた。

僕は七組なので遠からず近からず。

「それで、行くってどこに？」

僕の質問は彼女の背中に当たるも彼女はそのまま歩き出す。

行き先は屋上、僕の質問は解消されたが次は何をするの？ と質問したい。

昨日の話からするとサークルを全て支配するとか何とかだが、屋上でそんな事は出来ないだろう。

屋上には少女が一人、それ以外は誰も無し。

金髪の髪が見ていて眩しいなと思いつつ、その少女はどこかで見た事があると脳内をかき回してみると、ああ　今日は最後の時間サボってた生徒じゃないかと思いつく。

詳しく説明するならば僕の右斜め上の席に座る生徒、外国人。胸の大きさは彪光より上、だけどそんなの口に出して言えない。

「アンナ」

少女は振り返りこちらを見てくるその碧の瞳と僕の視線が合い、しばらく釘付けになってしまう。

吸い込まれそうなくらいに魅力的な瞳を持っている。それに整った顔立ちが尚一層引き立てて綺麗という二文字を構成しているのだ。

「あやみちゅー」

惜しいが発音は中々だね。

アンナという名前、外国人、記憶にある彼女の容姿からクラスメイトで間違いないがどうして屋上にいるのだろう。今日の授業も後半は出席してなかったし。

「紹介するわ。アンナ・アイベックス、海外と日本を行き来して二年前に日本に永住が決まったの。私の友達よ」

どうという経緯で友達になったのやら。

こちらへと歩み寄り、彼女は僕に抱きついてくる。

「ほんまよろしゅー。しえいしえい」

なるほど、アメリカ流の挨拶だ。

言葉はどうしてか方言っぽいんだけど、てかしえいしえいって謝謝？　日本と中国を間違っていないかな。

出来るならばもうちょっとこうしてたいが数秒経つと彪光の眉間がぴくりと動いたので離れておく。

「グローブ持った？」

「イエス、揉みマシタ」

「グローブ……?」

持ちましただるもう、でも可愛い。

二人の会話に些か妙な単語が含まれていたので思わず言葉に出した。

アンナは小さな鞆からグローブを取り出して見せてきたが、ちょっと待つて欲しい。

「何にそれ使うんだ?」

「何ってねえ?」

「イエス、ねえ?」

二人はお互いに顔を見合わせて、同時に僕へと視線を送った。

これじゃあ僕がグローブに関して疑問を抱くほうがおかしいみたいじゃないか。

それに先ず何をするかも説明してもらってないし、説明される前にグローブを取り出した時点でもうおかしい。

「殴りこみ」

そんな当たり前でしょみたいな顔で言われても。

「カチコミね。たまあとつたるゼヨ、兄貴」

兄貴って言うな、僕はどこの組にも属してない。

それにたまあとつたるぜよとかその魅力的な唇で言うのは止めよ
うよ。

「一旦落ち着こう? 後先考えずに行動するのは駄目だと思っただ」

ほらそこ、ジャブの練習するんじゃないで。

彪光も「いい拳ね、さすが鉄拳のアンナ」とか彼女を褒めるんじゃないで。やなくて止めさせて。

「考えてるわよ、ほらこれ見て」

彼女はいくつかの写真を懐から取り出して僕へ手渡した。

どこかの部屋へ入ろうとしている女子生徒が写った写真だ。よく目を凝らしてみると扉のプレートには第二資料室と書かれている。

よく撮れてるでしょ、と自信ありげな表情。まあ、よく撮れてるよ。でも学校にカメラを持ってきたりこういうの撮ったりって高校

生になつたばかりの女子がやる事かね。

さてさて写真についてだが、校内は広いので第二資料室がどこにあるかはまったく解らないが、別にそこがどうかしたのかなという疑問が一つ。

この女子生徒は何か用があつて入つたのかもしれないし特に問題などとは見当たらない。

「ここね、聞いた話だと使われなくなった資料を保管するためにあつて生徒が入る事は先ず無いらしいの」

ふうん、それなら入つてみようとかちよつとした好奇心が彼女を動かしただけなんじゃ？

「様子見してみたら数時間は出てこなかったわ、変でしょう？」

その人はよほど資料が好きなんだよきっと。

歴史とかもしかしたら資料萌えとかかもね。資料を見ると興奮して没頭して時間と我を忘れてしまふに違いない。

「鍵が開いてたら中をそつと覗いてみたらね、誰もいなかったの」

「……もしかして幽霊？」

「やだら怖いべ、兄貴」

アンナの言葉でゾツとした背筋は一瞬で治まった。

もう東北の方言とかも混ざっちゃつてるね、それと兄貴つて言うな。

「違う違う、ここに何かがあるつて話。きつとどこかのサークルが隠し部屋を勝手に作つてるのよ」

そんな馬鹿な。

苦笑いを浮かべる僕に彪光は不機嫌そうに扇子を閉じると踵を返して、

「百聞は一見に如かずよ」

そう言つて屋上から出て行くので僕とアンナは後を追いかけた。

彼女にグローブ置いていったら？ と言つてみるも首を横に振つて大事そうに鞆へ戻す。

暫し歩くが中々到着しないところから校内はやはり広いなと改め

て実感。中庭なんか僕が中学の頃に通っていた校庭くらいある。家が何軒建つかな、十軒ほどは余裕であろう。

近道なのか、その中庭を入れて横断。木製の足場があつて上履きは履き替える必要は無い。所々にベンチがあり、ここで昼食を頂いたらいつもより美味しく味わえそうだ。

緑の香りを鼻腔で味わいながら歩くのは清々しいがやや歩調は速め。

もう少しゆっくり歩いてこの香りを味わいたいものだが、言うても聞いてくれないだろうね。

「兄貴、おいしい香りでヤンス」

そうだね、この香りは美味しくも感じるね。

それともう兄貴でいいよ……。その呼び名で定着しちゃったようだし。

中庭から再び校内へ入ってさらに進行し、やや奥のほうへと行く。と日陰が目立ち始める廊下。

窓の外を見ると木々が多く茂っていてここらは陽光がそれほど射してこないようだ。

徐々に不気味とさえ感じてきた廊下をさらに進行するとそこに第一資料室はあつた。

人通りも少ないほうで隠れてサークル活動なんかするには取って置き場所ではあるが、まだ断定は出来ないね。

「鍵は……空いてるわよ」

中へ入ってみると壁など見えないくらいに本棚で埋め尽くされて、埃臭い空間に思わず口元を手で覆った。

「けほっ……きつと何かあるはず」

といつてもなあ……。

辺りを見回しても本、本、本。

アンナはとりあえずジャブを止めてくれないかな、埃が舞ってる。警戒しなくても何も無いと思うよ。

それにしても暗い。

窓の外には丁度大木があるためにこの部屋は先ほど通った廊下よりも暗い。今はまだ午後四時くらいだというのにそれらしい時間などこの部屋には存在しない。

「床を見て」

すると彪光は床を指差した。

薄く積もっている埃の上は足跡が刻まれていた。換気もしていないこの空間では当然であろう。普通よりやや小さめの足跡がいくつもあり、この小さい足跡の主は写真の女子生徒を連想させる。

「なんか奥に続いているね」

足跡を辿ると奥の窓側まで続いており、そこから右へ。

僕達もその軌跡を辿ってみるがもちろん本棚しかない。

「幽霊デスな……兄貴……」

「幽霊は足跡残さないよ」

本棚を調べてみるとするか。

プリントの束や本が詰め込まれており、その中でなんとなく本を取ってみる。

古典、それもかなり劣化していて本を開けば紙が破れる嫌な音が聞こえ出すのですぐに閉じた。

閉じると同時に埃が舞い、咳き込んで涙目。

何でこんな目に遭っているんだ僕は。

「怪しいわねこの本棚」

彪光は扇子を開いて口と鼻を防御しながら言う。

僕にも扇子の予備があつたら分けて欲しいな。

彪光はそつと指差し、僕らはその指差された方向へと視線を辿ってみると到達したのは本棚の上。

「隣の本棚見て」

言われるがままに視線を移動すると、隣の本棚と今僕達が調べている本棚……高さが微妙に違う。

「同じ本棚なのに、この本棚のほうが高いわ」

でもそれは設置したときに何か挟まったりしたんじゃないかな。

本棚の下を見てみると少々床と隙間があるが覗いても暗くてよく見えない。何か本棚の下にあるようだが別に気になるものではないな。

「それにここだけ埃が薄い。押してみましよう」

埃塗れの本棚を？ 冗談だろ？

「押しなさい」

冗談じゃないですぬすみません。

言われるがままに押してみるが、びくともしない。

「……お、重い！」

ぎしぎしと本棚が音を立て、アンナも僕の背中を押して手伝ってくれてる（？）が動く気配など無し。

当然の結果だ、だってそうだろう？

本棚は壁に接している、壁ごと動かせるような怪力が無ければ押して何かが起きる結果など見出せない。

「回転式なのかも」

その発想はどこから来るのやら。

先ずさ、僕達が今やろうとしている事は隠し部屋でも探してサークルを見つめるみたいな事、学校を改築しなければ無理だと思うよ。押すだとか回転式だとかはもう十分だ、そんなのあるはずが無いのだからここは引き返して喫茶店にでも行きたいね。

「ワタシ、右、押しマス」

「なら貴方は左側を引いて」

どうしてもやるといふのならやってやるけど、満足したら帰ろうね。最初は右回りを意識して押し、次は左回りでやるらしい。

当然彪光は少し離れて見学。僕らは埃まみれになるんだけど、君は高みの見物かね。まあ、いいけどさ。

僕はアンナに視線を送り、せーのっという気の抜けた掛け声をしてお互い押し引きをする。

ほら動かない、帰ろう。

そう言うつもりだった、本棚はびくともせず溜息をつくはずだ

ったのに、気になる結果はというと本棚はゆっくりと右回りに回転していったのだ。

「おおおお……!!」

押すと同時に思わず喉の奥から声が漏れていく。

思わぬ結果だったのだ、回転式の本棚に隠し部屋とかどう考えても学校にあるはずが無い。現実を直視してそれ以外など無視する僕のとつまらない思考はここで一部分だけが砕けた瞬間である。

「兄貴！ オツトめご苦労サマーでござル」

「僕は刑務所には入ってないよ！」

言いたかった事はなんとなくわかるがね、もうちょっと日本語を学んで欲しいな。

「さあ、行くわよ」

彪光は今流行のどや顔で先行。

この本棚、僕とアンナが動かしたんだけど。

せめてよくやったとかの一言くらい欲しかったな。

アンナは鞆からグローブを取り出して装着、準備万端だね。

奥へ進むと目の前には壁があり、行き止まりかと思いきや扉が傍にあった。

扉の隙間からは光が漏れており、微かに音も聞こえる。

そつと入る？

勢い良く入る？

彪光は扉を前にどう行動するのか、僕ならそつと入るほうだが。

彼女は小さく呼吸をして、扇子を閉じる。

そして勢い良く扉を蹴破った。

ふむ…… やつぱり君は気性が荒いというか、豪快というか…… まあそういう面も魅力的だけど。

「ちょ！ な、何よあんたら！」

中には女子生徒が一人、写真の人だ。

「騒ぐなクズが」

アンナはジャブを開始。

彼女がその行動をとるだけで威圧が生まれる。

それにしても妙な部屋だ。広さは畳四畳ほどくらいかな、壁にはパソコンのモニターがいくつもあり、彼女は一台のパソコンの前にいた。きちんとしたパソコンデスクであり、しかも扇風機付きで居心地は良さそうだ。

蛸足状態となっているコンセントが床にいくつも伸びており、この部屋での電力消費量は一体どれほどに及ぶのやら。使用した電力の支払いは学校だと思っただが、やりたい放題という言葉を実現させたような空間だ。

窓は無くとも照明が設置されているわでとても彼女がこの空間を作ったとは思えない。

「貴方、非公認サークルの一つね？」

「……そ、それがどうかしたのかしら？」

もはや否定は出来ないからか、隠さずに言う女子生徒。同じ一年……だったとしても人数が多すぎてどのクラスかは解らないが、一年が一人で非公認サークルの活動しているとは考えにくい。学年は二年か、三年かも。

「単刀直入に言うわよ。このサークルは今日から私が支配する」

「そ、そういう事……サークル狩りがまさかうちに来るとはね……」
サークル狩りという単語、彪光がやるうとしている事は彼女らの業界ではそう呼ばれているようだ。

「ははっ！ でもそうはいかないわよ！ この改造エアガンにスタンガン！ それに催涙スプレーもあるんだから！」

すると彪光はアンナへ視線を投げ掛けた。

首を軽く振って「行け」の合図。

アンナはステップを踏むと、瞬時に女子生徒の懐へと距離を縮め、女子生徒が右手にエアガン、左手にスタンガンを構えても時既に遅し。

「はぎゃ……！」

女子生徒の顔面にアンナの拳が減り込んだ。

ぐしゃり そんな音が鼓膜に届き、体中に鳥肌が駆け巡る感觸に陥る。

「あ、あぎゃ……。は……。ひ……」

鼻から溢れる血が彼女の顔を染めていき、もはや反撃どころではなく女子生徒は武器を落とした。

「い、いたひ……」

思わぬ攻撃だったのだろう、呂律も回らず焦点も合っていない。それほどの打撃、あのぐしゃりという音がアンナの攻撃力を教えてくれる。

女だからといって攻撃力が無いとは限らない、筋肉の質や体重移動に鍛え方で変わる拳の固さ、それらが合わさるとたとえ女性であ

つても攻撃力は出るのだ。

アンナの戦闘スタイルはボクシングが基本のようでステップは軽やか、それに構えも綺麗で先ほど放った懇親の右ストレートは綺麗だった。

完璧な右ストレートだと、素人の僕でも解る。

その右ストレートを顔面で受けた女子生徒には同情してしまう。

「にゃ……にゃんなの……あんな……」

膝をついたところで止めのアップパーで顎を捉えた。

「アンナね。よろしゅー」

その言葉、もはや彼女には届いていない。

床へと倒れて戦闘不能なのは一目瞭然。痙攣しているようにも見られるが見なかった事にしよう。

とりあえず女子生徒を壁側へと運び込んで凭れさせて、ポケットティッシュを持っていたので鼻に詰めて鼻血は止めておいた。

「何も殴らなくなつていいじゃないか」

「相手は武器を持っていた、だからこちらはそれなりの対応をしたまでよ」

それなりの対応……ね。

監視はアンナが引き受け、只管に彼女の顔面めがけてジャブをしていた。ほんの少し前に行くだけでその拳、女子生徒の顔面へ再び減り込むから止めたほうが良いと思うな。

逃げられないように上着は脱ぎ捨てられたのだが、僕には凶器が置かれているようなものだ。視線は決して女子生徒の胸へは向けないでおこう、隣に立つ彪光が僕の視線を何度か見て確認しているようだし。

女子生徒はまだ起きる気配が無いのをいい事に、彪光はパソコンを操作して何やらあくどい事をしている様子。

パソコンの操作は慣れてるようで、キーボードを打つ指はぎこちなさがなく流れるように動いていく。

「へえ、そいつ……生徒会の行動とか他のサークルの情報をかなり

集めてるようね。保身のためかしら、私達のような存在は流石にイレギュラーだったようだけど」

悪魔のような笑顔でパソコンを操作している彪光には少々距離を置いて僕は周りに置かれてる物を調べる事にした。

他のテーブルには小型の監視カメラがいくつも置かれており、何に使うのやらとそれらを僕は持ち上げた。

すると壁に設置されていたモニターの一つが連動して動き、僕の顔が映し出される。線は繋がっていて使えるのは解ったが何に使うのかが問題だ。

小型の時点で見つからないように、ってというのがこの監視カメラの補足説明なのは明らか。

良からぬ事に利用されるに違いない。ここで全部壊しておくべきかな？

「ふむふむ、二年松島音々子か」

女子生徒 松島音々子から剥ぎ取った上着のポケットに入っていた学生証を取り出して彪光はそれを見ながらキーボードを打っていく。

「やっぱり単純よね、パスワードなんて大抵は生年月日を使うもの。まだまだデータを取り出せるわ」

彼女がパソコンに夢中になっている一方で、小さく呻く声が鼓膜に届いた。

音々子……さん、目を覚ましたのかな。

「ん……ここ……あぎゃー！」

上体を前に起こした結果、ジャブをし続けていたアンナの拳が再び彼女の顔へ減り込んだ。

「は……はひっ……」

鼻にはティッシュを詰めておいたものの、更なる出血がティッシュを赤々と染めていく。

僕は慌てて新しいティッシュを渡し、彼女は新しいティッシュに取り替えて鼻に詰め込む。

落ち着いたところで音々子さんは口を開いた。

「小鳥遊……彪光っ」

「あら、私を知ってるの？」

「当然よ、あの小鳥遊家の娘ですもの。情報屋の私が知らないわけが無いわ」

なるほど、そう言われれば情報屋らしい部屋にも見えてくる。

「その小鳥遊家の娘がこんな事してるとわね、くふ……くふふっ」

「弱みでも握ったつもり？」

「いいのかなー、彪光ちゃん？」

弱みを握ったぞと言いたげなにこやかな表情で彼女は調子に乗っていたが、彪光はアンナに視線を送る。

ああ……駄目だこの人、これから可哀想としか言いようがない状況に陥る。

「くふ……くふ？」

アンナは彼女の腰を掴んで持ち上げて逆さまの状態にした。

これからやられる技を予測するに、パイルドライバーという技が見られるのではないかな。この目では滅多に見られない技だ。

「これからアンナは貴方に素晴らしい技をかけてくれるわ、喜びなさい」

「ま、待って！ くふ、くふ、くふ、ごめんなさい！」

「はあ？ 聞こえないわね」

「正直、調子に乗ってました！ す、すみませんでした！」

「アンナ、私がいやれと言ったら全力で……ね？ 一ヶ月は病院から出られないくらいに」

「了解でゴザるー！」

音々子さんの顔から血の気が一瞬で引いていくのが解った。

止めるべきかと考えるも、止めたら止めたで矛先が僕に向けられるかもしれないので僕は動けずにいた。

だってさ、アンナに勝てるわけが無いし何より彼女を逆さまで持ち上げている状況だ。その腕力もすごいが下手に止めに入って何か

の拍子に音々子さんがパイルドライバーされたら結局病院送りだ。

「な、なんでもしますから勘弁してください！」

「なんでも？」

「は、はい！ な、なんでもしますううー！」

ああ、駄目だねこの流れ。

彼女は開放されると共に何かを犠牲にしてしまうだろう。

「そう、ならば私の下僕になりなさい」

アンナに視線を送ると音々子さんはようやく解放され、しばらく放心状態でいた。

「ま、私も貴方の弱みなら握ったからお互い様よ。貴方、パソコンの中にすんごいの保存してるわね」

「へ……？」

「にやんにやんフォルダ、見つけたのよ。このド変態」

そうか、さっきのパスワードがどうたらとかで見つけたんだな。

音々子さんは顔を真っ赤にして、

「み、見たの？」

口をぽっかりと開けて驚愕に顔を満たしていた。

「もう全部見たわ、それに全部コピーしてそこにあつたUSBメモリに送っておいたから。これは頂いておくわ」

にやんにやんフォルダとは何かと好奇心が沸いてくるが彼女の様子を察するに、よほど見られたくない代物ならばこの好奇心は心中で潰しておこう。

「もう、なんていうか生きててすみませんでした……。なんでもしますのにやんにやんフォルダだけは公開しないでください……」

泣きながら懇願する彼女を見て、彪光はこれ以上となく嬉しいのか満面の笑みを浮かべた。

「フン、解ればいいのよクスが」

僕は結局何もしてないけれど、こうして僕達はサークルを手に入れ、音々子さんを従えて隠れ家も手に入れての万々歳状態だった。

音々子さん曰く、学校内ではこのような隠し部屋が多く、学校設

立者の気まぐれで作られたのだとか。今は隠居しているようで学校側は隠し部屋の存在を知らないらしい。

しかしながら今日のような方法は何とも気が引けるね。

僕がこれから彼女の抑止力となれば、サークル狩りをしていく事で学校は良くなりそうなきもするが……。

一つだけ解る事は、僕らの未来に正義は無いつて事だ。

1・5(後書き)

第一章、ここで終了です。次から第二章に入ります。

一週間の経過と共に学校はいつもよりも騒がしくなった。あたりを見回せばそれはすぐに解る、生徒会選挙が始まったからだ。

とはいえ僕らにとって生徒会という存在は今や敵、どの生徒会長候補が好感持てるとかあの人が生徒会長になったらこの学校は良くなるなどかという思考を持ち合わせたとしても意味など無い。

現在は四月中旬、五月上旬には二年と三年の生徒会長が選ばれてその後一年の生徒会長を決めるらしい。

二年、三年の生徒会長候補をまったく知らない一年生にどれほど自分らの情熱と応援したくなる公約を訴えて、一年の票をどれほど集められるかが重要だとか。

最近によく生徒会長になったら何々をするとか、何々な学校を目指すとか立派な文章が綴られた活動内容のビラを受け取ったのが度々あった。

近くにはマイク片手に訴える候補者がいたりでどんな顔ぶれかと見てみると中々の美人揃い。

まあそれはいいとして、学年毎に一人の生徒会長ね……。

確かに人数の多い学校ではこういう方法は有効かもしれない。学年毎に生徒会長がいて、仕事を分担していけば、ぱっと見て人、人の群を成すマンモス高でさえなんとかなるのだろうね。

気になるのは総生徒会長とかいう存在で、それは既に決められているらしいが公表されていないので誰なのかは解らない。

担任曰く、全ての生徒会長が決定してから総生徒会長も公表されるため、少なくとも後一ヶ月以上は解らないって事だ。

身近に総生徒会長がいて気づかないうちに隠し部屋を見られてたりしたら困るなあ。

隠し部屋に行くのならば警戒して行かねば。

といつても第二資料室へ入るのも、窓の鍵を開けておいて外から入れるようにしたので見つかる可能性も低くなったがね。

茂みに脚立を隠しておいていつでも脚立を使ってすばやく窓から侵入可能、脚立には紐を括りつけていて侵入後は紐を引っ張って回収。

更には周囲にセンサーを仕掛けており、人が探知されたときは壁に設置しておいた注意して探さなければ見つけれないくらいの小さな装置が赤くなり、人が無ければ青、念には念をつてやつ。

これも彪光の案で何をやるにしても抜け目が無い。

さてさて、この一週間はサークルを手に入れたにも関わらず他のサークルに殴りこむ事も無く特に大胆な活動はなされていない。

とても良い学生生活を保っている、素晴らしいね。

僕が先生だったらよく出来ましたの判子を押しあげたいくらいだ。

「監視カメラの設置は済んだ？」

けれども何やら判子を押しすにも保留にするべき行動を着実にやっている。

嵐の前の静けさ、そんな言葉が今の状況なのかもしれない。

「は、はい……全て終わりました」

なんていうか、この一週間で大きく変わったのは音々子さんが立派な奴隷として働いてる事。

最初の内はささやかな抵抗をしていたりもしたが、その度に彪光はにやんにやんフォルダと口にして、音々子さんは半泣き状態で従うの繰り返し。

調子に乗った彪光は何かとぺちぺち扇子で叩いたりで見えられない。

三日ぐらい経つと抵抗すらしなくなつて、そんな音々子さんを見ていたらあまりにも可哀想なので僕は友達と触れ合うように接しているが、彪光はそんな僕を見て苦い顔をする。

「音々子さん、キリがいいしこからで休憩しません？ ほら、お茶

も用意しましたよ」

壁に立てかけていた丸型テーブルを部屋の真ん中に置いていつでも一息つけるようにしておいた。

お茶を沸かすポットも茶葉もあってこの部屋は本当に何でもある。音々子さんの努力の結晶といったところ。

コツプは流石に四人分なんて無かったので、音々子さんがわざわざ僕ら三人分のコツプを用意してくれてありがたかったが、彪光は当然の配慮よ！ と扇子を開いて言ってたっけな。

「駄目駄目、そんなんじゃ」

すると彪光はいきなり僕へ駄目出し。

「いい？ この子にはね、もつと罵って言わないと駄目なの！ ほら、休憩を与えてあげるわクズが！ さっさと座りなさい！」

彪光は扇子を閉じて硬さを引き出し、音々子さんの顎を扇子で持ち上げてそう言つと、

「は、はい……ご主人様……」

頬を赤らめて音々子さんは素直に従う。

どこか嬉しそうなのは気のせいではないようだ。

「調教するの苦労したんだから！」
調教ね……。

ま、まあ……そういう人ならば仕方が無いけど、僕は言いづらいから罵る役割は君に任せるよ。

「ウチは殴るの、ちよつと痛すぎるカラ快感無いラシイでアルね」
そつち方面の人でもアンナの拳は流石に快感を得られないようだ。ならば彪光の扇子で頬を叩く行為が丁度良いのかも。

現に目の前でやられてなんだか気持ちよさそうな表情をしている音々子さんがいる。

「それで監視カメラなんて仕掛けて何するつもりなんだ？」

四人が席に着いたのを機に、今の状況を見て僕は自分だけ置いてけぼりな状態だったので言ってみた。

どこから手に入れてきたのかは知らないが、どうせ良からぬ方法

で手に入れたに違いない。

「別に監視カメラを校内の至る所に仕掛けただけよ、生徒会が活動する時に役立つわ」

「ふうん、生徒会の活動を妨害とか？」

「うん、そうよ」

当てずっぽうで言ったのに当たっちゃったじゃないかも。

「でも生徒会を敵に回すのは……」

音々子さんは乗り気では無く、僕も同感である。

「見つからなければ大丈夫よ」

僕はどうするべきだろう、彼女の将来を考えてゆつくりと時間をかけて慎重に説得するかもしくはこれが僕らのサークル活動なんだと開き直って彪光の言う準備とやらを手伝うか。

無論、前者である。

とはいってもどう説得すればいいのかが大きな課題として立ちただかっている。

そりゃあ悪戯とか可愛い領域から脱していないならいいけれど、監視カメラを仕掛けて更にアンナがいる時点で悪戯なんていう領域は既に脱している。

もしもアンナを悪いように使うのならばそれだけは全力で阻止しなければ病院送りの大量生産になりかねない。

「余裕を持ってゆつくりやりましょう、ね？」

ね？ じゃないよ。

「他のサークルからの攻撃も視野にいれておかないとね、第二資料室の鍵はかけておいたほうがいいかしら」

窓から入れるし、それもいいかもしれない。

音々子さん曰く、第二資料室は鍵の紛失すら気づかれないくらいに利用も少ないのでこのまま鍵をかけて自分達で鍵を所持していれば開かずの間になるわけだ。

一々ここへ来るのは外から遠回りする事にはなるが、この隠し部屋が見つかる可能性は極力低くなるね。

「ダイジョブね、アンナ皆倒すヨ」

うん、すごく心強い。

心強すぎて別に攻撃されてもアンナがいれば大丈夫だよなんて言いたくなるが、多勢に無勢という言葉があるので無茶は言えない。彼女とて何人もの相手を一度に出来ないと思うし。

「アンナ、貴方は確かに強いけどなるべくは見つからずに来るだけ対抗するような状況は避けたいのよ」

「他のサークルにも目をつけられたら連鎖が止まらないですしね」
「ならいつそのことひっそりここでお茶を飲む会みたいなのはどうかな？」

その時、言下に彪光は口へと運びかけたお茶をテーブルへと勢いよく置いた。

お茶が飛沫として飛び、テーブルはお茶塗れに。熱いお茶の雫を受けた音々子さんは何故か気持ちよさそうだ。

「そんなおじいちゃんおばあちゃんみたいな会にしてどうするの？
ん？ ねえ、何か言ってみなさいよ。贓物ぶちまけてみる？ ねえ」

「ごめんなさい、反省していますのでどうかその扇子で頬に減り込ませるのは止めてくれませんかね。」

「ごめんなさいを連呼すると頬から扇子を離して彪光は扇子を広げて扇ぎながら再び口を開いた。

「これからの行動としてはね、先ずは立候補者達の妨害をしましよ
う」

相手の事を考えると中々に賛成しかねる……。

「流石です、ご主人様！」

「あやみちゆ、ワタシもガンバよ！」

どうしてこうも僕は肩身が狭いのかな。

この中で僕は一番常識を保っていられていると思つのにや。

「それに音々子、貴方は情報集めが得意なのよね？」

「はい、そうですご主人様」

「ならば公認サークルのほうで何か困っているサークルがあったら探して。それと目安箱の監視も忘れずにね」

その意図が解らず僕は質問を試みる。

「聞いていいかい？ 何をするかをさ」

公認サークルつてのが引つ掛かる。

また何かあくどい事でもやらかそうつていうんじゃないだろうね。

「目安箱が置いてあるのは解るわよね？」

「ああ、廊下にあったの見た事あるけど」

「今は生徒会の奴らはまだ決まっていけど、立候補者達や生徒会補助役員つて奴らが目安箱を管理して活動してるのよ。だから生徒会役員が決まっていなくても目安箱は置かれてるの」

なるほど。

でもどうして目安箱の話を？

そんな視線を投げ掛けてみると彼女は溜息をつけてから口を開いた。

その溜息はそろそろ感づけよって意味なのか、説明が面倒なのかは定かではない。

「生徒会の目安箱に投げ込んだものを先に私達が回収して解決してやるの。もちろん物理的な妨害もするわよ。同時に問題を解決して公認サークルとつながりを持ってれば動きやすいもの。仕事を無くしてやれば形無しよ！」

つまり生徒会への妨害と公認サークルとのつながりを兼ね備えての行動というわけか。

これなら公認サークルには迷惑どころか助かるだろうし、生徒会も仕事が減って実は妨害じゃなくて手助けなんじゃないかと言いたいが、言ったところで悪い方へと方向転換したら困るために僕は口を塞いだ。

しかしながら物理的な妨害とは出来れば常識を逸脱するものではないようにしてもらいたい。

「もう大体は作戦も練ってるしね。音々子、とりあえずさっきの件、

頼むわよ」

悪い方へ方向転換は既になされているようで、僕は溜息をついた。そういう事ならお安い御用、そんな背中を見せてパソコンをすぐさまに操作する音々子さんは格好良くも見えるが、今までなんていうか悲しい部分ばかり見てたせいで残念だなあという感想。

何がどうなつてあんな、所謂マゾ体質になつてしまったのだろう。「とりあえずはそうね……目安箱は三年が担当しているものがないわ。あのクズに痛い目みさせてあげるわ」

あのクズとやらは彼女が以前に話していた元二年生徒会長であるう。

今は選挙に立候補して三年生徒会長はもはや当確が目に見えているんだっけ？

「後は私が調べておきます、今日はもうお帰りになられても大丈夫ですよご主人様」

「そう、ならば帰るとしましょう。あとは任せたわよ、上手く出来ればご褒美もあるわ」

「あはあ、頑張りますう……」

「ご褒美とは何なのかは知らないが知りたくも無く想像したくも無い。

2 - 1 (後書き)

少し書いていてプロットの時よりもちょっと歪曲しちゃった感じで、テコ入れするかもしれないが見直しも済んだので一先ず投稿いたします。うーん、まあいいとは思ってます。。。はい。

まだパソコンを操作する音々子さんを置いて隠れ家を出るのは些か気が引けるので何か手伝える事は無いかと聞いてみるが、彼女は一人でいるほうが集中していられるからと後押しされて帰路に着く。帰り道にて選挙に勤しむ人らを横目に僕らは校門を出る。

その人らの中にはもちろん元二年生徒会長がいて、名前は御厨夏江と確認。

彪光もきちんと確認したであろう。

「御厨夏江……ね。あいつの五臓六腑を引きずり出してぶちまけて天日干ししたいわ」

「怖すぎる事を唐突に言わないで欲しいな」

彪光の恨みを買ったとなると御厨さんはこれからどうなるのか心配でならない。

だが心配するだけでは駄目だ。

彪光達の活動を止められなくなったって、やり過ぎないように押さえ込む事は僕にだって出来るはず。

最低でも御厨さんの五臓六腑を引き出してぶちまけて天日干しをするのだけは阻止しよう。

「アンナ、ガンバルよ」

「頑張らなくていいよ!」

「いいえ、頑張って」

「ちょっともう……」

五臓六腑を引き出してぶちまけて天日干しという軌道に乗り始めたために軌道修正を試みるがくじけそうだ。

それから歩いて数歩目にてアンナはすぐ近くのアパートで別れた。彪光から聞くに、どうやら寮生としてアパートで生活しているようだ。寮の前にサンドバッグがあるのはアンナの私物としか言いよ

うが無い。

彪光はこれからまた大通りを越えて住宅街までの距離。

だが遠くにはどこかで見たことのある車両が一台停車中。

僕の家は大通りまではいかない。

彼女とは途中まで帰り道が一緒なので僕と別れた後は車両で帰宅するのである。

彪光も車両を目視すると足を止めた。

「貴方の家、どこ？」

「え？ まあ……近くといえば近くだけど」

「寄つてもいいかしら？」

唐突にそんな事言われましても、と考えるものの特に困るようなもんも無いし断る理由も無い。

「別にいいよ」

「なら行きましよう、人ごみに紛れてそつとね」

どうやら車両の中で待機している護衛に気づかれないうつにとの真意が汲み取れる。

護衛に意地悪でもしたいのかは知らないが、こうして彼女と友達として親睦を深める事で僕のサークルでの抑止力がよりよく働いてくれるのを期待しておく。

「まさか……この小屋に住んでるの？」

親睦は深まるどころか僕は心の中で今、大きな溝を作った。

「アパートってという言葉知ってる？ 知ってるよね？ 知らないとか言わせないよ」

「それは知ってるけど、こんな二階建てじゃなくて何十階もあるのがアパートでしょう？」

「それはきつとマンションだ！」

彪光はすごい顔をした。

どうして僕はこんなすごい顔なんて単純な表現をしたのかというと、一目でわかるほど大量の驚愕と衝撃を大鍋に入れて混ぜ込んだら出来ましたというくらいに解りやすい顔だったからだ。

中へ招き入れると今度は、

「狭すぎるんだけど貴方って毎日こんな窮屈な部屋に住……ああ、貴方は音々子タイプね？ 窮屈さで快感を得て過ごしてるのなら納得するわ」

「おいやめろ、窮屈さで快感なんて得ないよ。僕はそんな性癖の持ち主じゃないから誤解しないでくれ」

生きてる世界が違うってやつ。

僕にとっては風呂トイレ付きで六畳の空間というのは不自由なし居心地もそれなりに良く過ごしていられているが、彼女と僕とは広いという意味には大きな違いがあるので説明もしないでおこう。何かとトイレや風呂を覗いて狭い狭い呟くので僕はお茶を用意して移動させて座らせる。

これ以上室内を見回られて感想を述べられたら僕の心が耐えられない。

「貴方って寮生じゃないの？ 寮生もアパートに住んでるらしいけど」

「僕は一人暮らしさ、学校側にも了承を得てるの。それなりの事情ってやつで」

「事情ねえ。差し支えなければ聞いてもいいかしら？ そういうの気になるのよね」

まあ話しても構わないが、気分が下落するのは僕ではなくて彪光のほうなのは間違い無い。

いいの？ 本当に聞きたい？ そんな質問をしてみると彪光は扇子を開いて頷いた。

まあ、それでも聞きたいのなら僕は一度お茶で口内と舌を潤してから口を開く。

「僕の両親さ、幼い頃に死んだんだ。交通事故でね」

彪光は開いたばかりだというのに扇子を閉じ、顎につけた。

弱々しく曲がる眉、それに今の仕草はどこか申し訳無さそうな様子。

気にすんなよ、って僕は眉毛を上げて表情で伝えておく。

「その後は養子として引き取られたけど高校受験あたりじゃあ関係は最悪。それで高校入学と同時に家を出て行ったさ。弁護士を通して養子縁組も解消、書類上だと世話してくれる人とか名前のみ借りたからそれなりに手続きはすんなりと終わったんだ」

「……でも生活はどうするの？ お金は？」

「そりゃあぶん取ってやったよ、遊んで暮らせるくらいにね。もちろん弁護士を通してだよ？ 金持ちだったのが唯一感謝できたかな。これにてそれなりの事情は終了。」

誰かにこうして話すのは初めてだし、話す相手もいなかったからか心の中は泥酔をろ過したくらいにすっきりしてる。

僅かな沈黙の後にて、

「いいわね。貴方は自由を手に入れてるの、それを実感して舌で転がして味わうくらいに堪能しなさい」

すかさず扇子を開いて彪光はそう言った。

彼女の言葉には自分は不自由だという意味が添えられている気がする。

「君は……」

「何？」

「いや、ごめん。なんでもない」

今の生活に不自由してる？

とか聞いてみたらどうなっていたかは定かではないが、護衛を無視して僕の住むアパートへ寄ったりとちよつとした反抗を見せる様子が聞かずとも彼女の中に渦巻く不満ははっきりとしている。

「変な奴。貴方の十二指腸でウインナー作りたくなつたわ」

今日はやけに言葉が刺々しい。

もしかしたら、苛ついているのかな。

すると彼女は扇子を閉じて眉間に当てて溜息をついた。

「ねえ……今日はどうしたの？」

さっきまで聞くつもりは無かったが、彼女の溜息が引き金となっ

て口が動いてしまった。

僕は来客用ではなくお楽しみ用にとっておいたチヨコのお菓子を添えて聞いてみる。

この際、彼女に差し出すのがお菓子にとっても良い選択だと思う。お菓子にとっても、って何だよ僕。

そんな自分へのつつこみを入れて話を聞く。

「別に」

「別に、にしてはおかしいよ」

「どこが？」

「どこが、って強いて言えばなんか発言が刺々しいし」

彪光は沈黙した。

それからお茶を飲み、僕も釣られてお茶を飲んで、また沈黙。

時計の針が唯一この空間に流れる音として漂う中、ようやく彼女は口を開いた。

「……私、来週誕生日なの」

「そりゃあ良かったじゃないか」

すると彼女は拳をテーブルの上に振り下ろした。

その先には僕が先ほど差し出したお菓子があり、ぐしゃりと袋の中身は粉碎された音が僕には悲鳴に聞こえる。

「十六になったら家督を継いで遺言が残されても？ それで家族関係が悪化しても？ 護衛が毎朝送り迎えして帰りはストーカーのように待ってても？ 冗談じゃ無いわ」

彼女は拳を高々と上げてもう一度振り下ろす。

その先にはやはりお菓子だ。

しかしそれよりも気になるのは彼女が口にした遺言という言葉。遺言という事はつまりだ、家督を継げと言える立場も考慮して大黒柱である父親を亡くしたようだが、彼女の先ほどの話からは様々なものが読み取れる。

今は余計な詮索などしないでおくとするがね。

「……ごめん。ちょっと鬱憤が溜まってた」

ストレスを少しでも解消できたようで何より。
殉職したお菓子はせめて口の中へ運んでもらいたい。

「でもいいの？ 僕に色々と話しちゃってさ」

「何か差し支えでもあるの？ 貴方は私の家柄は大体想像できてると思うし」

「そうだけど、いや、なんていうか……」

「よく誰かにぶちまけたいって時あるでしょう？ それがさっき解らなくも無い。」

僕もそれなりの事情の結末を話したらすっきりしたしね。

「貴方に話すにはまだ早すぎたかしら？ 私達の交友度があるとしたら下の下？」

「いいや、中くらいかな？ 今もまだ上昇中」

彪光は笑った。

心から湧き出てきたかのような笑み、それはとても美しかった。

口へと運ぶはずのお茶を服に引っ掛けるくらいにね。

「熱っ……」

「もう、ドジね」

まだその笑顔が継続されていて、僕は参ったなとお茶をこぼした事に対しての言葉として誤魔化した。

僕の性格じゃ君の笑顔に参ったんだとは言えないわけで。

「これからはお互いぶちまけたい話があったらすぐにぶちまけましょう？」

ぶちまけるは今日何度聞いたのやら。

そんな誘いの笑みと、彼女と交わす妙な約束も加わった笑みをしつつ僕は頷いた。

「そろそろ行くわ。またここ、来てもいい？」

閉じた扇子で扉を叩きながらは彼女はそう言い、

「いいよ、いつでも」

扇子を開いてのご帰宅。

一応、車両の近くまで送ってその日は彼女と別れた。

自分の部屋に戻って、僕は腰を下ろす。

夕飯まではまだ早い。テレビも興味がそそるのは放送されていないようなので僕はテレビを消してリモコンをそこらに投げる。

……自由ね。

砕けたお菓子を口の中へ運んで、その甘みと今の自由を重ねるようにして口の中で転がした。

堪能できてる？

ああ、僕は今堪能しているよ。

そりゃあ一人暮らしたと飯作りは面倒だし美味しい味も見出せずに特に不味くも美味しくも無い炒飯で妥協してたり、朝起こしてくれる人がいなきゃ僕は遅刻確定だ。

けれども何をやるにしても許可なんていらぬ。

勉強するときは家庭教師を何人も引き連れてこられないし自分の自由時間は知らない偉そうな人と顔合わせをして世間話を無理やりされられる事も無い。

今の僕は自由だ。

でも一人だとこの部屋は広すぎて、切なくて……。

音楽を流しても心の中まではどうしてか響いてこない。

どうしてか？ いや、目を逸らさないでよく凝らしてみると心の中に答えがはつきりと刻まれている。

読み上げるのは簡単。

僕は、寂しい。

彪光の笑顔がすぐに恋しくなった。

まったくさ、あの笑顔は卑怯だよ。

2・2（後書き）

原稿用紙では300枚以内、五章構成を今のところはプロットに沿って執筆してますがもしかしたらもう少し長くなるやも。

どうにも学園物というか、書き物自体が元から苦手です。うまくまとめられないのが原因ですねはい。精進精進。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175w/>

僕らの未来に正義は無い

2011年11月17日03時27分発行